

Title	慶應義塾図書館和漢圖書分類目録 第一巻
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.164(492)- 165(493)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

駒場野聯隊大練記 (西郷從德複製)

駒場野の聖蹟 (前田清謹述)

前者は明治三年四月十七日明治天皇、當時近郊たりし駒場野に行幸、御一代最初の御閱兵とも云ふべき在京各藩諸兵の野外演習を天覽あらせられし際の何書並に指令等を集載せし記録の複製にして、原本は陸軍省の藏本である。後者は其の聖蹟を略述せられたもので、今、兩書に依つて其の状況を記述する。この演習は在京各藩の歩兵を九聯隊十八大隊に編成し、これに砲兵騎兵の若干を加へ總軍數一萬八千餘、其の軍裝は千差萬別で、中にはマンテル・ズボン・靴と云ふ新裝のものもあり、其の兵式は佛蘭西式・英吉利式・和蘭式に加へて日本風もあり、又武器に於ても同じく種々雑多で、舶來銃もあれば、種子島銃も交つて居つた。是の日天皇には御金巾子に御引直衣、即ち白の御袍に、眞紅の御長袴を召し御英姿凜然として御愛馬に乗御あつて、午前五時御出門奉迎の諸兵を隨へさせられ、途中、赤坂の上州矢田藩主吉井信謹邸と澁谷の御嶽社に御少憩、其の間は御板輿に御乗替えあり、八時駒場野の御野立所に著御、諸兵は直に三種の操練を行ふたと云ふが、如何なるものであつたか、既に不明である。午後三時舉つて拜謁並に天杯を下賜、更に優渥なる勅語を賜ひ、諸將率一同感激して之れを謹承、四時還幸の途に就かせられ、前記二ヶ所に再び御少憩、六時宮城に著御あらせられた。猶ほこの際、聯隊旗、大隊

旗等の制定があつて、當日朝に之れを渡され、演習後、直に返納せられたといふ。就中、聯隊旗の如きは今日と同じく、たゞ總を附せざることが異なる。この演習の後、藩兵は佛蘭式に統一され、翌年は鎮臺公と呼ばれたのである。如上由緒あるこの聖蹟も六十有餘年の星霜と人家の稠密とによつて自ら忘れ去られむとするに至り、西郷侯爵等夙にこれを遺憾とし、其の地に本年六月廿七日聖蹟記念碑を建造せられた。寔に敬謝すべきである。又駒場野の次に行はれた。三年九月八日越中島为天覽訓練に於ては天變突發の爲め震襟を惱し奉つたこともあれば、これ等の記録も複製保存を切望するものである。

序で乍ら明治天皇の聖蹟に關しては年々歳々指定等に依つて保存せらるるも、大正天皇の聖蹟に於ては未だ其のことを聞かぬ。寔に遺憾千萬である。一日も早く指定其の他適當の方法を講ぜられむことを切に希望する次第である。(昭和十二年七月五日武田勝藏)

慶應義塾圖書館和漢圖書分類目錄 第一卷

昨年五月先づ第四卷(政治・外交、經濟及び社會問題、統計、法律を收む、本誌十五ノ二書評欄参照)を出した本目錄はこゝに第一卷の刊行を見た。本卷に於ては第一門哲學、宗教、第二門教育を收め、第一門は哲學の項に於て、一、哲學及雜書(五八頁)、二、東洋哲學及經書(二六八頁)、三、論理(四頁)、四、心理(一五頁)

五、美學(四頁半)、六、倫理(七三頁)、内譯1、倫理學(八頁)、
2、修身、道德(六五頁)、七、社會學(一二頁)、宗教の項に於て
一、宗教一般、神話傳説及雜書(二五頁)、二、神道(三六頁半)、
三、佛教(七一三頁半)、四、基督教(二六頁半)、第二門は、一、
教育學及教授法(七頁半)、二、教育學史、教育史(三頁半)、三、
學校、圖書館(一九頁半)、四、教育行政(二頁)、五、教育雜書(四
三頁半)に分たれ、この頁類の比率は自からその學問の實狀と歴
史を表示してゐる様に思はれる。總頁數一三二二頁、大體昭和十
一年三月末現在圖書館藏有の第一門一八、二九六冊、第二門一、
七五六冊、合計二萬五十二冊を収録したものであつて、前年報刊
行(大正十年度)以來十五年間に於ける増加冊數實に一萬一千七
百九十六冊(序文)、倍加の實狀を見て、この方面に關係諸氏の努
力が窺はれる。

かくて吾人は我等に直接關係のある歴史の部門の刊行の速かな
らんことを待望しつゝ、本部門の刊行によつて當圖書館利用者研
究者に一段の便益を加へたことを感謝するものである。(間崎万
里)

日本資本主義史論集

(土屋喬雄氏編著)
育生社刊

我が史學界はその近代的誕生後未だ日なほ淺しとは云へ、既に
幾多の華々しい論争を記録してゐるが、最近數年に互つて行はれ
た日本資本主義論争程に猛烈果敢なそれを未だ見なかつたと謂つ
ても過言ではあるまい。

書評

本書は同論争の一方の立役者たる東大助教土屋喬雄氏の右論
争に直接間接に關聯を持つ論文集である。その第一編を「農業史
の諸問題とし、新地主論を始め、山田氏の後役勢論批判」等日
本資本主義に於ける半封建性を繞る生々しき論戰の跡を集められ
てゐる。本論争は當面の論敵たるべき山田盛太郎氏が終に出馬せ
ず、加之、論争自體が衆知の如き事情で自然中止の形となつて既
に一の「歴史的事實」とされて居り、論争そのものを手頃に紹介
した論文や著書*さへ現れてゐるから、全てをそれに譲ることゝ
するが、只、土屋氏が講座派の人々の山田氏「分析」に對する態
度を以て信仰的セクト的なそれであるとし、之に一言でも加える
者があれば、團體的な力を以て之を壓せんとするものとして、そ
れらに對し端的に不満を表明されてゐるが、これは同論争を通じ
ての氏の不満の表示として買はるべきものと認める。

*後掲マニユファクチュア論争をも含めての日本資本主義論争
を經濟史の初學者にも判り易く、しかも論争の抑々の發端か
ら各新聞紙の小欄に至る迄巨細の別なく引用して本論争に對
する絶好の手引書となつたものに内田穰吉氏著『日本資本主
義論争』がある。一書の紹介中甚だ失禮ではあるが、右の書
には論争過程の諸論著の核心は手際よく引用されて居るから
山田氏「分析」が之亦衆知の事情で非常な高價となつて居る今
日、更にそのレーゾンドールを深められてゐる。但し惜し
むらくは右は全く客觀的見地に立つものとは受取り難く讀者
は之を更に公平なる眼を以て讀み分けることを必要とする。
第二編は「工業史の諸問題」とし、内容は主として徳川時代特